

One Love 通信

2006年11月発行

第33号

97年に活動を開始した時、ルワンダにはほとんど日本人がいませんでした。今ではJICAルワンダ事務所もでき、旅行者も訪れるようになり、一気にルワンダの日本人人口が増えました。

【親方がやってきた!!!】

前号でお伝えしたとおり、私そしてルワンダで働いている義肢装具士二人に義足作りを教えてくれた尊敬すべき親方と靴職人の佐藤さんが、ルワンダにはるばるやってきてくれました。飛行機の遅れで、キガリに着いたのは夜中になってしまったけれど、そんな疲れも見せず、とても精力的にルワンダでの日々を過ごしていました。

二人とも海外旅行は初めて。親方たちはいつもよりラフな格好で、心なしか若返ったような？しかし迎える私とガテラはとても緊張。何しろ親方の下を離れてから、初めて自分たちの活動を見てもらうのである。

ざっとキガリの町を見てもらい、早速工房へ。作った義足や使っている材料、そして機械類の設置場所や運営の方法を説明する。最初に指摘されたのは、机・機械・道具などの配置の仕方が効率的でないということ。今の状態だと、作業する人が無駄なくスムーズに動く事ができない。しかもせっかくの機械や工具の長所を生かすことができない。なるほど、と一つ一つの意見を聞いていく。親方たちの知識や経験がルワンダに伝わっていく。

そして材料や工具がそろっていないという事も指摘された。「あの道具は？この材料は？」と聞かれても、たいていのものは「ない」という返事。親方たちは改めて、ルワンダで物を手に入れることの難しさを感じたようである。しかしないものは、ない。その状態で進めていかななくてはいけないということをすぐに理解してくれて、更なるアドバイス。現在持っている材料も、ルワンダ国内での調達が難しいという事を知り(使っている材料は主にケニアで仕入れる)、「そういう場合は、これで代用して…」と数々のヒントを。



【親方特訓中】

そうこうしているうちに数日が過ぎていってしまう。親方たちは、郊外のホテルに滞在していたが、一緒に行動している時はお昼や晩ご飯を共に。ルワンダでお昼外食をする時は、ビュッフェスタイル中心。サラダ・ポテト・ご飯・スパゲティ・青野菜の煮た物・肉のシチュー・豆など、種類は豊富。その中から好きなものを好きなだけ取って食べる。確か親方は肉食、しかし佐藤さんはしつこいものは好きではなかったような？お味はどうですか？うーん、これなら大丈夫かな？しかし佐藤さんは、とっても辛いルワンダの唐辛子(ピリピリ・ンブジ、またはウルセーダと呼ばれる)を知らずにどばっとかけてしまった。私たちが「あ」と思った時にはもう遅い。あまりの辛さに食べられず、お皿を取り替えてもらった。

時間のあいた時に、近くのお土産屋さんへ。私は買い物をする時に、いつまでもうじうじと考えて、決断を下した時には既に売り切れてしまったという事がしばしばあるのだけど、親方は気持ちの良いくらいパッパと買っていく。彫刻やアクセサリ、編んだ籠など選んだ後、値段の交渉。ここで力を見せるのはガテラである。彼は昔、こういう民芸品を卸す商売をしていたので、知り合いも多いし、元の値段もしっかり知っている。交渉の末、なんとか納得のいく値段で折り合いがついたようである。

またある時はドライブ。市内を見てもらった。メインストリートにはたくさんの方が集まっている。それらの人たちを見て「おっかねえなあ」を連発する親方。大丈夫です、親方。彼らは悪いことをするために、町角に立っているわけではありません。ただ立っているだけなのです。

佐藤さんはルワンダのバナナが美味しいと言うことを聞き、町角でバナナ売りのおばちゃんを見かけるたびにバナナを買ったそうな素振りを見せる。迷いに迷って買ったそのバナナ、果たして美味しかったらうか？

そしてワンラブから車で10分くらいのところにある虐殺記念館を訪れた。ここは2年前にできた場所で、ルワンダの歴史(植民地になる前の平和な時代のルワンダから、虐殺後の復興を目指す現在まで)をルワンダ語・英語・フランス語でパネルやビデオなどを展示しながら説明している。そしてその当時殺された人たちのスナップ写真(家族から提供された)や着ていた衣類、また頭蓋骨なども展示されている。毎回書くことだけれど、ルワンダを知るためには、過去にあった虐殺から目をそむける事はできない。この紛争のために手足に障害を持つ人も増えてしまった。親方たちにも、ぜひその事実を知ってもらいたかった。94年の虐殺が起こった時、私は親方の下で修行をしていた。お昼に食堂でお弁当を食べている時に見た、ルワンダ大統領の乗った飛行機が撃ち落とされたというニュース。その後のガテラの安否がわからないという不安な気持ちを、佐藤さんに話した記憶がある。

滞在中の一番素晴らしかったことは、親方自ら、ルワンダの義肢装具士たちに技術を教えてくれた事である。装具をつけているワンラブの義肢装具士二人にモデルになってもらい、患部の型を取るところから、仮合わせをするところまでを、みんなの目の前でやってみせる。日本もルワンダも基本的に同じような作業をしているにもかかわらず、このテンポの良い流れは一体なんなのだろう？全ては親方たちの経験のなせる技なのであろうか？

石膏を使う作業では、ズボンが汚れてしまうので、私が普段使っている赤い布を腰に巻いての大健闘。いつもはおしゃべりなスタッフたちも、その動きをじっと見つめている。金物をクイッ、クイッと曲げていく作業では、改めて私と親方の経験の差を感じた。私も以前はこの滑らかな作業を憧れの目つきで眺めていた(もちろん今もですが...)。スタッフたちは親方の手下となり、材料や工具を手渡していく。

またスタッフたちは時として、材料や工具がなかったりすると作業を中断してしまうが、親方が色々なもので代用をしていくのを見て、多分たくさん知識がついていったことだと思う。無い物を作る、これは親方の得意分野である。



【このネジをしめて...】

そして巡回診療にも同行してもらった。場所はマウンテンゴリラのいるルベンゲリ。キガリから車で2時間ほどの所である。

いつもより人の集まりは悪いものの、数十人の人が順番を待っている。親方は早速、白衣に着替えて気合が入っている。仮合わせのために義足を履いている人には、具合の悪いところがないか、実際に歩かせて様子をチェックする。不都合があれば、その場で直せるところは直し、再び装着してもらおう。この仮合わせの作業は、義足を作る上で、とても大切な工程である。

新規の患者さんは、親方自ら石膏のついた包帯を使って、患部の型を取る。スタッフたちは相変わらず、真剣にそれを見つめている。

無事に巡回診療も終わり、みんなと遅い昼食。今日はウサギの丸焼き。そして鳥の丸焼きとポテトフライ。こちらでは注文してから料理が出てくるまで、とても時間がかかる。この日も例外ではなかった。待ち疲れた頃にやっと出てきたウサギ。親方たちは今ひとつ口に合わなかったようであ

る。ちなみに私も初めてウサギを食べた。

10日ほどの短い滞在だった。でも親方と佐藤さんが教えてくれたことは、きっとルワンダでこれからも生き続ける。何よりも親方たちが来てくれたと言うことが嬉しかった。そして帰る時には「また来るな」と言ってくれた。ありがとう、親方そして佐藤さん。

ところでお土産にと、スタッフから渡されたバナナビールは、日本で飲んだのだろうか？

【ワンラブ10周年記念】

6月10日、ワンラブの10周年記念の式典を行いました。政府の人たち、今までお世話になった人たちを呼んでの式典です。

それ以前は準備のために大忙し。飾りつけ、音響、飲物の用意、掃除、人員の配置など目が回りそう。

当日は晴れ。少しずつ人も集まってきました。結局この日の来賓で一番偉い人は、キガリ市の副市長さん。彼女がキガリ市の障害福祉について担当しています。

この頃には3人の日本から来た助っ人もそろい(彼女たちについては後述)、ルワンダの衣装を身にまといつつ、張り切っている。しかしいつものように大股で走り回れないことが不便そう。

まずはルワンダの伝統舞踊でおもてなし。簡単な挨拶をしてから、ワンラブ内を見せよう。

最初はメインの義肢製作所。ここでは義肢装具士たちがスタンバイし、義足の作り方、患者さんの受付の仕方などを説明している。普段こういう施設を見る機会の無い副市長さんは、いろいろと質問をしてくる。スタッフも真剣に説明を続けている。ただ義肢製作所はあまり広くないので、例えば実際に患者さんの型を取っているところをみんなに見てもらえなかったのが残念。

そしてワンラブ内の施設の説明。ここには大きく分けて、義肢製作所・宿泊施設・職業訓練などを行なうための教室とホール、そしてレストランがあり、一つ一つを見せよう。レストランには、今まで撮った写真を展示して、ワンラブブランドが昔ただの湿地だったこと、それを人力で今のような場所に作り上げたと言うことを順を追って見せよう。また義足を作っている様子や患者さんのこと、障害者スポーツや、パラリンピックに出場した時の写真なども展示した。

それからこの間出た「希望の義足」の英語バージョンも展示。この本はあとで副市長さんにプレゼントした。

ぐるっと見終わったら、今度はまた民族舞踊。そして寸劇。この寸劇は、スタッフたちが考えたもので、足をなくした障害者がすることもなく、道端にいる。そこにワンラブで義足を作ってもらった障害者が通りかかり、「お前も作ってもらえよ」と勧める。その障害者はワンラブに行き、手続きをして義足を作ってもらおう。同時に巡回診療の案内。巡回診療先で義足を作ってもらおう障害者たち。最後は義足を履いた障害者たちが「ワンラブって何て素晴らしい!!!」と言っておしまい。

正直言って、この劇は失敗。ダラダラと長く、ポイントが

何だったのかわからない。もっとどのように患者さんを受け入れているか、どんなふうに作業をするかと言うことを具体的に演じて、その上で「ワンラブって素晴らしい!!!」としたかったのに、焦点がぼやけてしまった。

また日本でスワヒリ語の点字本を作っている人がいて、その人がたくさんの点字カレンダーや教本を譲ってくれた。それらを盲人の組織の人たちに寄付をした。猫や犬の写真のついたそのカレンダーはとてもかわいく、私も1冊家に飾ってある。さらにその組織の人による詩の朗読。ワンラブがどうして始まったか、どんなことをやっているかが歯切れの良い韻を踏みながら読まれていった。その後は、ガテラのスピーチ。ルワンダではまだ障害者支援が必要なこと、そしてそれを進めて行くためには政府の協力が必要なことなど。

副市長さんからのスピーチもありました。まだ新しい副市長さんは、キガリ市でどのように障害者支援をしていくか試行錯誤しているところ。しかしこれからのワンラブの活動に注目していることや、もっと障害者福祉に力を入れなくてはいけないということを熱く語ってくれた。

昼の部が終わり、夜の部へ。これからはみんなへのおもてなしである。みんなの好きな音楽をかけ、ビール・ソーダそして食事を振舞った。みんなただとわかると、ここぞとばかり飲むし、食べるし...

かなり疲れた一日である。履きなれない靴を履いたせいもある。しかしとりあえず成功。

あつと言う間の10年だった。この10年に一気に年をとったような気もするし、まだまだあの頃のような気もする。この先10年、果たしてワンラブはどのように変わっていくのだろう。良い方向に進んでいくように、これからもみんなと力を合わせて、がんばりましょう!



[10周年の式典で絵本を見せる]

[ゴリラ・ネーミング・セレモニー]

6月17日、マウンテンゴリラの住む山の麓で、去年生まれた子供ゴリラに名前をつけるセレモニーが行なわれました。この式典は去年から始まり、毎年恒例の行事にしていくとか。

朝早くキガリを出発し、ルヘンゲリ到着。山の空気はす

がすがしい。普段は見えにくいルヘンゲリの山々も、朝の空気が澄んでいるためか、とてもきれいに見えている。野原に設置されたステージ。このあたりは行事も少ないのだから、たくさんの人出である。

ステージの上ではちょっとしたルワンダの踊りや寸劇などが行われている。その寸劇はいかにも素人っぽくて、思わず声援をあげたくなる。その他アクロバット。他愛もない芸だけれど、娯楽の少ない村の人たちにとってはメチャクチャ面白いらしい。そしてゴリラの着ぐるみを着た人(?)が登場。今ふうの曲にあわせて踊っている。中には子供のゴリラもいるようだ。

そしていよいよゴリラの名づけ。ルワンダで働いている大使館関係者、ヨーロッパのある都市の代表者、ルワンダの政界人、ルワンダの学校の生徒、彼らが名付け親のようである。去年生まれたゴリラは全部で12頭。世界中で700頭くらいしかいないマウンテンゴリラ。これらを保護するためには、当然資金も必要となってくる。このネーミングセレモニーのために、スポンサーを募っているようだが、そこにはルワンダの大統領を始め、政界人、在ルワンダ大使、企業、動物保護のための団体などが名を連ねている。それぞれの子供ゴリラのエピソードに沿って名前が付けられた。そして最後は大統領夫人のスピーチ。

私も何度かゴリラを見に行った事があるが、自然の中で生活しているゴリラを、手が伸ばせば触れるくらいの距離で見ることが出来る。一つのゴリラのグループには、シルバーバックと呼ばれる雄のゴリラがいて、その姿は男らしく、何度見てもほれぼれする。ゴリラを見るためには竹やぶの生い茂った山の中に入っていかななくてはいけなく、またその費用も決して安いものではないが、一見の価値はあると思う。

今日もルヘンゲリの山のどこかで、新しい命が育っているかもしれない。来年のネーミングセレモニーの時まで、どうぞすくすくと育ちますように。

【海を渡ってきました!】

あれは今年の何月頃のことだったか?ピースボートの人からメールをもらった。そこには「水先案内人として、乗船してもらえませんか」という事が書かれていた。ピースボートの事は、なんとなく知っていた。世界一周する船で、その中ではいろいろと世界について話をしたり、寄港地でその国の人と交流をしたり…。しかしその程度の知識しかなかった。

乗船する区間はシンガポールから、インドのコーチンを経由し、ケニアのモンバサまで。約2週間の船旅だそうだ。

船の旅など初めてである。2週間も船の中にいるなんて、退屈してしまわないのだろうか?映画に出てくるような、ゴージャスな客船なのだろうか?食事はいつもコースで、テーブルマナーを知っていないと、恥をかくのだろうか?などいろいろな疑問が次々と出てくる。

水先案内人とは、船の中でいろいろな分野について講演やパフォーマンスをする人たちのことをさすらしい。船に

乗っている間に、活動のことやルワンダの事を話しても良いそうだ。しかもこの間出た絵本や、ルワンダグッズなどを販売しても良いとのこと。

さて7月30日、日本からシンガポールへ。この間は飛行機。シンガポールから乗船する水先案内人は「寿 kotobuki」という沖縄の影響を受けつつ、様々な分野の音楽を取り入れながら精力的にライブを20年以上も続けている男女二人のミュージシャン。そしてインド国内及び世界的に平和運動を行っている活動家ラムダス夫妻。

シンガポールはガテラも私も初めて。空港には車が迎えに来てくれており、ホテルへ。寿の2人も同じホテル。この二人はもう何度もピースボートに乗っているそうだ。寿のナビさん(女性)はとてもパワフルな人で、アジア方面は強そうである。嬉しいことに、一緒に夕飯を取ろうと誘ってくれた。彼女が選んだ先は？屋台料理の集合体ホーカーズ。100軒近いお店が入っているとのこと。ここにはローカルフード・中華・マレー・インドなど様々な料理が揃っている。値段もお手ごろ。ビールを飲みながら食べるローカルフードは格別。

翌日はいよいよ船に乗る日。ホテルに車が迎えに来るのは夕方なので、それまでシンガポールの町を散策する。こうして歩いてみると、アジアの国はとてもエキゾチック。今までずっとアフリカに虜になっていた私だが、改めてアジアを感じたいと思う今日この頃。

そして船へ。海から他の国へ旅立つとは一体どういうことなのだろう。空港のようにイミグレーションはあるのだろうか？と言うことは、そこでパスポートをチェックするという事なのだろうか？シンガポールの港は、飛行場のようにざわついておらず、なんだかこれから芦ノ湖遊覧にでも行くような感じである。ピースボートのスタッフに導かれ、船内へ。ドキドキ。そこで船内での生活の仕方、施設の案内、食事方法などを説明してもらい、部屋へ。おお、なんとテレビ・ビデオ・冷蔵庫付のスイートだ！これから2週間、ここが我が家となるのである。



【デッキで寿の2人と】

じっとしていられないガテラと私は、早速レストランへ繰り出す。レストランは二つあり、一つはコースで食事ができ、もう一つはもっとラフに丼物中心のメニューである。

出航は夜中。海に明かりが輝いて、とてもきれい。警笛を鳴らして出港する。船は思ったより揺れていない。しかし今回のクルーズは、日本を出てから台風に見舞われて、ベトナムまでの海は大荒れだったそうだ。そんな時に乗らなくて良かった…。

翌日は打ち合わせ、そして夜は寿のライブ。デッキに作られたステージで、星空を眺めながらのコンサート。初めて聞いた二人の曲だけど、ナビさんのトークも面白く、またヨシミツさんの淡々と演奏する姿が良いコンビネーション。気が付いたときには一緒に歌っていた。

次の日はプロジェクトXのビデオを見ながら、ルワンダやワンラブの事を話す。終了後絵本の販売。既に半分が売れてしまった！

船では毎朝新聞が配られ、その日のスケジュールを知ることができる。船中の施設で、いろいろな講演や遊び、催し物がある。これらは船に乗っている人たちによる自由企画もたくさんあり、早朝にはデッキに出て体操もある(しかし一度も参加しなかった…)。

ある日は日本から洋上学校と称して参加している子供たちへのレクチャー。しかし子供たちもお疲れのようで、ちょっとダレ気味。それから水先案内人をサポートする人員として集まってくれた水先案内人パートナー(略して水パと言うそうだ)の人たちと一緒に居酒屋(上記丼物レストランが夜には居酒屋になる。しかもラーメンもある！)で一杯飲んだり。さらに何も無い日は、プールのあるデッキで日光浴。

それにしても船の甲板で食事をするというのは、とても気持ちが良いのだなあ。時には船が揺れて、テーブルの上のコーヒーがこぼれてしまったりするけれど、快適なことには変わりない。そして当然のことながら海は広い。見渡す限りの水平線。時々現れるほかの船。沈んでいく夕日もとてもきれいだった。私の父は船旅が好きで、船から眺める朝日は最高だと言っていたけれど、これも私の怠惰のせいで一度も見なかった…。後悔。

そうこうしているうちにインド・コーチン着。インドも初めての国である。一週間ぶりに陸地を眺める。今日はコーチン観光。おのぼりさんになったようで、わくわくする。バスに分乗し、まずは海岸ベリへ。ここでは独特な網を使って漁を行っている。そして昔建てられた教会、王宮、ユダヤ人街へ。特に驚くほどのものはないけれど、なんだかいいな。素朴で。そして昼食。インドと言えば、もちろんカレーである。案内されたのはきれいなホテルのレストラン。歓迎の印として、おでこに紅をつけられる。ここでピュッフェ形式のカレー三昧。もちろんおいしかったのだが、私はどうしても日本のカレーに惹かれてしまう。食事の後は、インドの伝統的なカタカリダンス。これは激しい踊りではなく、顔の表情(眉毛を上げたり、口をひん曲げたり)でいろいろなことを表現する。これをマスターするには、かなりの年月が必要とか。確かに眉毛の動き方は面白く、ガテラは見終わってから早速まねをしていた。こういう子供っているよね。

その日は8月6日、広島に原爆が落とされた日ということもあって、夜は市内の学校で、平和フェスティバルを行った。今回のクルーズでは、日本から天野文子さんという広島で

被爆をした方が、水先案内人として乗船していて、核兵器廃絶を訴えている。このフェスティバルでは、彼女の訴えや平和活動家のラムダス夫妻のスピーチがあり、そしてとても素晴らしいことに、ルワンダの虐殺を生き延びたガテラにも、その場で語る機会が与えられた。

以下、そのメッセージである。

「日本の人達は、今日は原爆を落とされた日として思い出しています。どうぞ今一度、原爆によって亡くなった人達のことを思い出してください。私たち全ての人類は、二度とこのようなことが起きないように、核兵器を拒否しましょう。そして原爆が落とされた後、生き延びることのできた人達の命が、続いていること、そしてこれからも続いていくことを喜びましょう。私たちルワンダ人は、核兵器を落とされたことはありません。しかし植民地政策という間違っただけの政治をルワンダに植え付けるために、国民を分けられてしまいました。そしてその結果、国民同士が殺し合うという悲劇が起きました。植民地にするためにやってきた人達は、自分たちの欲を満たすために、私たちが殺しあうのを黙って見ていたのです。今、私たちルワンダ人は、その問題から立ち直りました。私たちはこれから、自分たちの問題は自分たちで解決し、世界の愛と平和を求めていきたいと思えます。そして私たちは世界中に、教育が普及し、様々な技術が正しく使われていくことを望み続けます。」

このフェスティバルでも寿のライブがあった。単純に歌を歌うだけでなく、平和や愛のメッセージを含んだ彼らの曲は感動的で、また大きな声を出して一緒に歌ってしまった。そして最後はみんなで校庭に出て、ろうそくで人文字を描いた。闇に揺れるろうそくの灯りは幻想的で、みんなそれぞれの平和を祈った事に違いない。

翌日は自由行動。昨日行ったユダヤ人街にちょっと気になるものがあつた。それはランプである。真鍮でできており、軒先などにぶら下げ、火を灯す。思わずこのランプを3つも買ってしまった。コーチンでの交通手段はトゥクトゥク(ここでもそう呼ぶのだろうか?)。バイクを改造して、後ろに二人が乗れる席をくっつけた、簡単な乗り物だった。

そして夜コーチン出港。寿の二人と平和活動家のラムダス夫妻はここでお別れ。よく見かける、紙テープを投げて船の出港を見送る、あれをやりました。船では寿の曲をかけ、みんなでコーラスしながら、だんだんと船は港を離れていく。

インドからは昔からの知り合いである女性も水先案内人として乗ってきた。ケニアのミュージシャンを引き連れての乗船である。彼女の本職は物書きであるが、ケニアのスラム住民を支援したりもしている。

船内では引き続きレクチャーを行なう。ガテラによるルワンダの歴史や文化、現在の様子なども語られた。

またケニアのミュージシャンのライブも行なわれた。久々のアフリカンリズム。しかしルワンダに住んでいる私としては、「ルワンダの音楽や踊りの方が繊細だ」とついひいき目で見えてしまう。

ある晩はアジアの町で作った衣装をまとってのフォーマルコンテスト。その審査員を頼まれた。ベトナム、インドと経

由し、女性たちはドレスを仕立てたようだ。みんなそれぞれ素敵。ガテラが気に入ったのは、韓国の女性が来ていたショッピングビンのチョコリ。彼女へ私たちがエレガント賞を。

ところで船内で時間のある時は何をしていたか? トレーニングジムで汗を流していました。ガテラは大のジム好き。朝食が終わり、一休みすると必ずジムへ。そしてそれに付き合わされる私。

更に私たちのレクチャーの一環として、ルワンダで、ルワンダ人のエキストラを使って撮影された「Sometimes in April」と言う映画を上映した。日本でも評判になった Hotel Rwanda という映画もあるが、私はこちらの Sometimes...の方がずっと虐殺の様子を正確に現していると思う。実は Hotel Rwanda には描かれていない、隠されたゆがんだ事実もたくさんあり、ルワンダ国内では評価されていない。しかしこの Sometimes... 日本で公開されていないため、字幕がない。そこで力を発揮してくれたのが船内で諸々の通訳をしてくれている女性たちである。一つのスクリーンで映画を流し、もう一つスクリーンを用意し、映画のあらすじを映した。そのあらすじをまとめてくれたのが彼女たち。何らかの形で日本以外の国に関わってきた彼女たちは、堂々として、自分の意見をはっきり言う。かっこいいぞ。

そのあらすじのおかげで、見に来てくれた人は遅い時間であったにもかかわらず、最後まで残ってくれた。そしてたくさん感想を話してくれた。この日持ってきた絵本が全て売れた!

そして船の中での最後のレクチャー。スライドやビデオを使って、今までのワンラブの活動とこれから必要なことを話した。ピースボートの企画として、ピースボールという各地にサッカーボールを届けて交流をすると言うことがあるらしい。ぜひその企画にルワンダも入れてもらえればと話を進めた。ルワンダに港はないけれど、ケニアまで来た船で来た有志が、飛行機でルワンダまで飛んで、そこで障害者とサッカー交流なんて、楽しそうではないですか!

この数日、インド洋を渡っている間に、数羽の鳥を発見した。船の立てる波間を飛び魚が飛び交い、それを狙っている。昨日も今日も明日もこの鳥を見かけると言うことは、どうも船と一緒に旅をしているようだ。

8月14日朝、ケニア・モンバサ港着。私たちはここで下船する。但し明日の出港を見送ってから。と言うわけで、丸二日自由。モンバサは来慣れた町。ルワンダで買うことのできない物を買ひ込むため、今日は一日ショッピングとなる。

夜はみんなと近くのレストランに行った。モンバサは治安が悪いと伝えられているので、多くの方は自分たちで歩くことを避けている。でもポイントさえ押さえれば、大丈夫。ニヤマチョマと呼ばれるスタイル。ここでは鳥・ヤギ・羊・牛・魚などのバーベキューを楽しむことができる。サイドディッシュとして、とうもろこしの粉を練ったウガリなど。みんな美味しいと言ってくれる。やはりアフリカの料理がほめられると嬉しい。

最終日はモンバサの町を観光。所々で同じ船に乗って

いる人たちに会う。そして船に戻り、荷物をまとめ、ピースボートでお世話になった人たちに、モンバサで買った少しばかりのお土産を渡す。

下船する時は寂しかった。「あぁ、みんなはこれからも旅が続くんだなぁ」と思った。ガテラも紙テープをつかみながら、船の上の人たちに何か叫んでいる。さようなら、ピースボート。楽しかったよ。

ここで核兵器廃絶を訴えている天野さんも一緒に下船する。私たち、そして天野さんもモンバサで一泊してから、それぞれの地へ向かう。案内されたのは、リゾートホテル。とても素敵な作り。着いたのが夜遅かったのも、その素敵さを堪能できなかったのが残念。最後の夜にやっと天野さんとお話をする機会を得た。この方は高齢であるにもかかわらず、今も戦い続けている。その気持ちを継続していくことは大変だろう。私たちも見習わなくては。天野さんにビールをご馳走になり、美味しい食事をほおばりながら、ピースボートでのこと、平和について語り合った。

翌朝は4時起き。早朝の飛行機でナイロビまで飛び、ルワンダまで一直線。午前中にはキガリに到着してしまった。

2週間の船旅。ピースボートのスタッフは、私たちが初めてで戸惑っている時に、いろいろと助けてくれました。そしてそこで出会った人達、ありがとうございました。もしもまたこういう機会があれば、ぜひ参加したいと思います。3ヶ月に渡るみんなの旅、無事に終わりますように。



[すっかり船長になりきるガテラ]

【3人目の研修員/パトリックです】

8月中旬、パトリックと言う名前の義肢装具士が、日本へ旅立ちました。2004年から神奈川県国際技術研修員制度の支援を受け、今回で3人目のワンラブからの研修員となります。

パトリックは今までで一番年下で、経験も前の二人よりも一番短い。でも好奇心が強く、今回の研修員に推薦しようとした時に、一番目をきらきらさせたのも彼です。研修が決まった時の嬉しそうな顔、忘れられません。

今回は親方がもろもろの事情から、彼を受け入れる事ができず、しかし親方の愛弟子の義肢製作所に話しを持っていくと、親方の所からはそう遠くない、同じく横浜市

戸塚区の義肢製作所での研修が決まりました。

すでに他の国からの研修員と仲良くなり、いろいろなところに出かけているようです。

彼は隣の国ブルンジで育ち、紛争が終わった後、ルワンダに戻ってきました。そしてルワンダで義足を作っている工房で2年間技術を学び、ワンラブにやってきました。そうそう、親方がルワンダに来た時、一番助手として動きのよかったのもパトリックだったようだ。

今回日本行きの準備をする頃、私とガテラはピースボートに参加するため、彼の旅立ちを手伝えませんでしたけれども、以前研修員を受け入れてくれた研修センターで働いていた前田さん、そして日本事務所を手伝ってくれていた小澤さんがルワンダにボランティアとして滞在してくれていたのも、彼女たちが手続きを進めてくれました。日本へ行くためには、多少なりとも日本語を勉強しておく必要があるため、日本語レッスンを行い、ピザを取るための書類作成、そして神奈川県庁職員の人たちとために連絡を取り合ってくれました。

パトリックにとって、初めての飛行機、そして海外。出発前は、無事にケニアでピザを取れるだろうか、飛行機の乗換えを間違えないだろうか、とても心配したようです。

そんな心配もなんのその。無事日本到着の知らせを受けました。日本語も着々と上達しているそうです。

彼も前回の研修員同様、日本でたくさんの技術を身に付け、友達を作り、来年3月無事にルワンダに戻って来られますように。そしてルワンダで彼の帰りを待っている人たちに学んだ技術を伝えてくれますように。

【ルワンダあれこれ】

ルワンダは急ピッチで町がきれいになっています。ちょっとルワンダを離れると、いつの間にか新しい建物が建っています。前面ガラス張りのビルとか、最近ではショッピングモールもできました。また車の量も増え、仕事が引ける頃は渋滞も。

前回買い物をする時にに入れてくれたビニール袋が禁止になったと書きました。今もそれは変わらないのですが、ちょっとこれは厳しすぎるぞと思う点。海外で買い物をした人が空港に着いた時に持っているビニール袋も取り上げる事もあります。この間テレビで見たのは、わざわざスーツケースを開けて、中を調べていること。う～ん、これはちょっとやりすぎのような気がする。

少し話題は古いがワールドカップ。相変わらずルワンダの人はサッカー好きです。テレビの前を陣取って、ビールを飲みながら眺めている。ゴールが入るたびに大騒ぎ。仕事をしている時も、彼らの騒ぎ声でゴールが決まった事を知ります。サッカーに興味のない私は、彼らの姿を楽しんでいる。次のワールドカップは南アフリカで開催されるとか。その時の熱狂は、多分今の比ではないだろう。ルワンダチームがんばれ。ワールドカップ出場を目指して！

8月末、ルワンダで産業展が行われました。これは毎年開かれ、ルワンダで作られている物を中心に、ウガンダ・ケ

ニア・インドなどで作られた商品も紹介されています。日本の大々的なエキスポと比べると、とても小規模な催しですが、ルワンダの人たちはこのお祭りを楽しみにしています。ビニール袋が禁止されているので、自分のバッグを持ち、気分が入っています。売られているものは、例えばルワンダの民芸品。それぞれの団体が作った木彫りの彫刻や小物、手提げ袋。よく目にするのが、子供の制服。私が楽しみなのは、ジュースやジャムなど。添加物を使っていないこれらの食品は、とてもおいしいです。特にルワンダの蜂蜜は絶品です。私がルワンダに来た頃は、一種類の紅茶・コーヒーしかなかったけれども、最近はいろいろなブランドのものが出回っています。パッケージも味気なかったものから、今はとてもおしゃれ。きれいに刺繍を施した袋に入っているものもあります。

このエキスポでみんなが楽しみにしている事の一つとして、屋台があります。ヤギや牛の串焼きをビールを片手にほおばっています。香ばしい匂いについつられて食べてしまう。これはソースや醤油の匂いにつられて買ってしまふ焼きそばやとうもろこしに共通した魅力があります。

片隅にはステージが作られ、なにやら踊っています。しかしその踊りはどこかぎこちなく、一生懸命アメリカとかその辺のプロモーションビデオを真似して踊っているのですが、隣の人に合わせて踊ろうとしているせいか、四角四面の踊りとなってしまっています。彼ら、ルワンダの踊りは自然に踊れるのに、洋物となるとこんなに不自然。思わず「がんばれ！」と声援を送りたくなる。

この日は2時間くらいでさらっと見て、と思ったのですが、気が付けば日が暮れていました。日本から来たお客さんと一緒に、買い物三昧の一日。

前号でも書いたバイクタクシー。これが突然禁止になりました。何でも、危険だ、そして治安を乱すとの理由で。しかし数日後にはまた復活。あれは一体なんだったのだろう？

【助っ人、現れる】

5月から6月にかけて、日本から助っ人がやってきました。最近ルワンダでの仕事量も増え、息も絶え絶えになっていたのですが、この助っ人はありがたい。1人は3ヶ月間、そしてもう二人は1年間。それぞれ得意の分野で張り切っています。

3ヶ月間手伝ってくれた女性は、ラジオ局に勤めていたのでオーディオ関係にめっちゃやたらと強い。10周年の式典の時も、アンプやミキサーをつないだり、音の調整をしてくれたり。機械の苦手な私は脱帽。もう少しルワンダに滞在し、ややこしい配線を教えて欲しかった！残る二人は大奮闘中。今回のワンラブ通信には、そんな二人からのコラムも。

助っ人(1)【ルワンダでの生活が3ヶ月目となりました】

ルワンダでの生活が始まり3ヶ月目となりました。会社を退職しルワンダに行くと言ったとき、周囲の人々は「アフリ

カ…。ルワンダ…。！？」と驚き、まるで想像も出来ない地と、それはそれは心配してくださいました。実際のルワンダは、赤土の大地に木々の緑、広がる青空が一緒となり、とても美しいところです。千の丘の国といわれる様になだらかな起伏があり、斜面に沿って決して立派とは言えませんが小さなお家がたくさんあるその風景は、どこをとっても絵葉書になりそうな程です。治安は基本的な約束事(人ごみではカバンに注意、夜は一人で出歩かないなど)を守れば何の問題もなく、諸外国の観光地で常にスキあらばカバンが取られてしまう場所よりも安心して道を歩けるというのが私の印象です。日本で心配して下さった方には「住み心地のよい場所です」と声を大にして宣伝したい気持ちです。

ワンラブでの生活の多くは従業員と共にあります。仕事を共にする、これが本当に大変で、「何で？」「どうして？」「なんでこんな事しちゃうの？」の連続です。育った社会、文化が違うため、感覚そのものが違うと頭で分かっているも目が点になってしまい、時にはイライラ…。ガテラさん真美さんとお話しているとよく「教えなければならぬ」という言葉が出てきます。その言葉を聞いた時に私はすごく納得し、反省してしまいます。「何で？」と考える前に、教えなければならぬ。それは日本では当たり前の仕事方法・考え方であってもルワンダではそうではない。通じると期待してイライラするのは、自分勝手と気持ちを引き締めます。ただやはり教えるという事は一筋縄ではいかないので、ちょっと大変で時々めげそうになります。だからこそ、10年間「仕事を教える」「人を育てる」ということをずっと続けて来られたお二人の、「教えなければならぬ」という言葉に重みを感じ、同時にワンラブの歴史も感じます。これから先の10年、こうして育った人達がワンラブを支えていってほしいと願っています。

助っ人(2)【ワンラブの10年、その人たちの歩み】

去る6月10日、ワンラブの10周年記念式典が行われました。写真展示会場には、今までの写真が展示されました。私が初めてルワンダに来たのが2001年ですから、もうほとんどが完成していたときしか私は知りません。しかし、写真を見ると、最初の最初は、本当にただの湿地帯でした。そこから、草を抜き、土を盛り、焼いたレンガを一つ一つ積み上げて、今の建物が完成しました。植えた植物も今では立派に育ち、とても美しい場所となりました。その工程は、すべてが手作業だったそうです。セメントをこねる機械も、重いものを運ぶクレーンもありません。レンガを運ぶことから、セメントを混ぜる作業まで、すべてが人の手によって行われるのです。ですから、ここには働いている人がたくさんいます。

今ワンラブで働いている人の中には、初期のころから働いている人たちがいます。最初はレンガを焼いたり、建設の手伝いで、ただ物をあっちからこっちに一日運ぶだけだったりした人が、働きを認められ、日雇いから、年金にも加入している正職員のセキュリティーとして長期に渡って働いていたりします。中には、レストランを始めたときに、掃除や皿洗いをするようになり、料理の仕方を覚え、一人前の

料理人になった人もいます。彼らもまたワンラブとともに人生を歩み、成長してきました。

ルワンダではまだまだ仕事がない人がたくさんいます。自分で収入を得て生計を立てるといのは、とても大変なことなのです。

私が以前1年間滞在していた2004年に、ワンラブ内の工事の手伝いをするために、10人ほどの人たちが雇われました。まだ子供でした。年の頃は、15・6といったところでしょうか。物を運んだりするための日雇い労働者です。顔にはまだ幼さが残っています。多くは、道で生活していた子供たちでした。そんな彼らをワンラブで働くようにスカウトしたのは、ガテラさんでした。物乞いをしたり、物を盗んだりすれば、生きていくことはできていました。それでも、毎日朝早く出勤して働き、その報酬として収入を得ることを選びました。ただ食べて生きるのではなく、怒鳴られながらも働くことを選んだのです。もちろん、全員がまじめな訳ではなく、次第に来なくなったり、物を盗んでクビになったりする人もいます。

しかし、今回2006年に再びワンラブに戻ってきたとき、その中の何人かが残って働いたのを私は見ました。初めはただ物を運ぶだけだった子供たちが、建設のノウハウをちゃんと叩き込まれ、立派な青年に成長していました。

また、ワンラブブランドはとても広いので掃除をするにも大変な労力です。最近新たに掃除のおばちゃんたちが雇われました。

彼女たちは全員、今まで街で物乞いをしていた人たちです。

給料は日払いで、決して高くはない報酬です。

もしかしたら、物乞いをしていた方が高い日もあったかもしれませんが、それでも、仕事をして、その労働力に対する報酬をもらうという選択をしました。今まで適当に自分の好きなように生きてきた人たちが、毎日仕事をするようになるということは、私の想像する以上に大変なことかもしれませんが、彼らや彼女たちを見ながら、しっかり働いて着実に生活していった欲しいなあと思っています。

【おことわり】

当団体はご提供いただいた個人情報について、皆様からご同意をいただいた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。また通信発送の祭は、充分な注意をしているつもりですが、お名前・ご住所の間違い、重複して送付されるなどの間違いがございましたら、ご連絡ください。

【お願い】

年賀ハガキ、暑中見舞いハガキなどで印刷に失敗したものなどがございましたら、是非寄付をお願いいたします。

ワンラブ通信 第33号
2006年11月
発行: ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト
〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南6-6-69
Tel:0467-86-2072 Fax:0467-86-2092
e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所)
onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)
http://www.onelove-project.info/
郵便振替口座: 00210-5-66497
ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

